

聖書：コリント人への手紙第一 5：6～8

説教題：誠実と真実の種なしパンで

日時：2022年4月24日（朝拝）

パウロは今日の箇所ではパン種のたとえを用いて語ります。パン種とは何でしょうか。パン種とはパンを焼く時に粉の中に練り込むことによって全体を膨らませるためのものです。私自身はパンをそのようにして作ったことがないため、それがどれほどの効果をもたらすかを体験としては知っていませんが、聖書にしばしばこのたとえが出て来ますので大体のイメージは持っています。まず思い起こすのはマタイの福音書 13 章 33 節の御言葉です。イエス様は神の国についてこう言われました。「天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉の中に混ぜると、全体がふくらみます。」その前の節にはからし種のたとえが語られていますが、からし種もパン種も小さいものです。そんなものに何の意味があるか、何の力があるかと思いません。しかしパン種を粉の中に入れてやがてパンは大きく膨らみます。神の国もそのようなものだと言われました。今見えているところは小さいからと言って、それを軽蔑してはならない。それは後の日に大きな実を結ぶと。これは私たちにとって励ましのメッセージです。しかし聖書でパン種はどちらかと言えば悪いイメージで用いられている場合が多いようです。マタイの福音書 16 章 11 節に「パリサイ人たちとサドカイ人たちのパン種に用心しなさい」というイエス様のお言葉があります。そのパン種とは彼らの教えを指すことが次の節に示されています。あるいはルカの福音書 12 章 1 節でイエス様は「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい」と言われました。今日の箇所もそのような悪い意味で使われています。パウロは 6 節で「わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか」と述べた後、7 節で「古いパン種をすっかり取り除きなさい」と言っています。明らかに悪い意味で使われています。ではこの古いパン種とは何なのでしょう。

前回見た 5 章 1～5 節には、コリント教会の中に父の妻を妻にしている者がいると言われました。それは異邦人の間にもないほどの淫らな行いであるとパウロは言いました。このような罪が行われていることも問題ですが、それ以上にパウロが問題にしたことは、教会がこの罪を放置していたこと、黙認していたことでした。多くの学者は、その罪を犯していた人が教会の有力者だったからではないかと述べています。コ

リント教会はその罪を悲しんで、その人を取り除くこと、すなわち教会から除名にするという処置を行っていませんでした。ちなみに聖書は罪を犯したらすぐ除名せよとは言っていません。誤って一時的に罪を犯しても、悔い改めて正しい歩みに立ち返るなら、その人は主の十字架を通して赦され、回復されます。しかしこのコリント教会で罪を犯していた人は悔い改めていなかったようです。1 節に「現に聞くところによれば」とあったように、それは皆に知れ渡っていたこと、周知のことでした。また「父の妻を妻にしている」と現在形で書かれていますように、その状態はなお継続されていました。なのにコリント教会はこの人が重要な人物の一人でもあったためか、何も対処しなかった。むしろ自分たちは優れた知識と知恵を持っている、都会的でレベルの高い教会だとうぬぼれていました。そんなコリント教会にパウロは、その人を自分たちの中から取り除け！と言いました。ですから今日の箇所「古いパン種をすっかり取り除きなさい」とは、まずその人を取り除きなさい、除名にきなさいということの意味していることになります。

前回は戒規の目的として本人の救いのためということが言われました。5 節の最後に「それによって彼の霊が主の日に救われるためです」とあった通りです。教会の外に追い出されること、主のご支配の外に追いやられることは恐ろしいことですが、そのような方法を通し奇跡的な大手術がその人に行われることを祈り願い、教会はそのことをします。そして今日の箇所では戒規のもう一つの目的が語られています。それは 7 節にある通り、「新しいこねた粉のままでいられるように」ということです。言い換えれば教会の純潔を保つためということ。わずかなパン種が全体を膨らませます。ですから罪を放置すれば、それはやがて教会全体に伝染して、すべてが崩壊することに至りかねません。一つの腐ったリンゴをそこに置いておけば他のリンゴも腐ってしまいます。ですからわずかなパン種だからと言って温存してはならない。それをすっかり取り除け！とパウロは言います。教会が腐敗から守られるためです。新しいこねた粉のままでいられるためにです。

しかし私たちは思うかもしれません。取り除くべき人を取り除いたら後に残った教会は果たして新しいこねた粉のままなのだろうか。その一人を取り除いても教会にはなお罪が沢山あるのではないか。第一、今の自分は新しいこねた粉のままと言える存在なのだろうか。そう考えるかもしれない私たちに、パウロは 7 節の真ん中で大切な真理を語っています。それは「あなたがたは種なしパンなのですから」という部分

です。古いパン種がそこに含まれていない者たちとされています。なぜそう言えるのか、その根拠がその後に書かれています。「私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです」と。これはどういう意味でしょうか。

過越について書いてあるのは出エジプト記です。イスラエルはそれまでエジプトの奴隷状態にありました。そのイスラエルがモーセを通して救い出される時、エジプトへのさばきの最後として行われたのが過越でした。エジプト人のすべての家では、その家の初子、長男が死にましたが、主の命令に従って傷のない子羊を屠り、その血を二本の門柱とかもいに塗ったイスラエルの家はさばきが過ぎ越しました。これによってイスラエルはついにエジプトから出て行くこととなります。その際、彼らは主の命令に従って種を入れないパンを七日間に渡って食べました。出エジプト記 12 章 15 節：「七日間、種なしパンを食べなければならない。その最初の日、あなたがたの家からパン種を取り除かなければならない。最初の日から七日目までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。」 13 章 7 節：「七日間、種なしパンを食べなさい。あなたのところ、種入りのパンがあってはならない。あなたの土地のどこにおいても、あなたのところ、種入りのパンがあってはならない。」 大事な点は、それまであったパン種を一掃するということです。家の中から全部取り除くのです。これにはどんな意味があるのでしょうか。イスラエルが奴隷として生活していたエジプトでは偶像礼拝が行われ、また偶像礼拝に基づく悪徳が満ちていました。イスラエルはそこから救い出され、これから神にこそ従い、神によって導かれる新しい民としての生活へ進んでいきます。その出発において古い種を全部取り除くということです。古い生活を象徴するパン種を一掃するのです。それを新しい生活に持ち込まないということです。

パウロは今日の箇所「私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られた」と言っています。ご存知の通り、出エジプトにおける過越の子羊はイエス・キリストを指し示すものでした。イスラエルの救いはただではありません。イスラエルも言うまでもなく罪ある者たちです。そのままではさばかれるべき存在です。その彼らへのさばきが過ぎ越すのは身代わりの犠牲が支払われたからです。各家のかもと二本の門柱にその血が塗られたことは、子羊の犠牲を通して救うという神の方法により頼むことを意味します。つまりここに神が将来くださるまことの子羊イエス・キリストにより頼む者にこそさばきが過ぎ越すという真理が示されています。いかにキリストの十字架

の下に身を置くことがさばきから身を守るものであるかが示されています。

そしてパウロはすでに過越の子羊キリストは屠られたと言っています。キリストの十字架にコリント教会の信者たちは信頼しています。ですからコリント教会の信者たちは、過越の出来事を経てエジプトを出て救い出されたイスラエルそのものであるということになります。かつての古い生活を後にし、神の民としての新しい歩みへと導き入れられた者たちです。その彼らは古いパン種をすっかり取り除いたはずですが、それを後ろに捨て置いて今や新しい生活へと進んでいる者たちです。そういう彼らを指して、あなたがたは「新しいこねた粉」であると言われているわけです。「あなたがたは種なしパン」であると言われているわけです。

ある人はそう言われても、自分はそんなに前と比べて大きく変わったようには思えないと思うかもしれません。しかしこの手紙の冒頭 1 章 2 節でコリント人たちは「キリスト・イエスにあって聖なる者とされた」人々と言われていました。また「聖徒たち」とも言われていました。キリスト・イエスを信じ、キリスト・イエスに結ばれている者たちは聖とされた、聖められたと言われています。これはもちろんもう罪を犯さない人間になったということではありません。私たちはなお罪を犯します。しかし以前とは大きく異なる霊的状态へ導かれているということです。キリストと結ばれ、そのキリストから来る徳と力によって、私たちは一度限りの決定的な聖めをまず最初の時に受けているのです。そうして新しいこねた粉とされているのです。この事実を良く受け止めなければなりません。まことの過越の子羊であるイエス・キリストの犠牲が払われることを通して、この方に信頼する者たちは今やエジプトから救い出された旧約のイスラエルのように、大きな恵みを受けて新しい歩みへと導かれている者たちなのです。

ですから最後の 8 節の勧めが続きます。「ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。」 「祭りをしようではありませんか」という言葉は現在形で書かれています。つまりキリストの救いを経験した人にとっては毎日が祭りであるということです。主の救いを感謝し、祝い、喜ぶ祭りの生活、礼拝の生活です。そうして最後のゴールを目指して旅を続けます。このような私たちにとって大切なことが二つあります。一つは古いパン種を用いないことです。出エジプトの救いを受けたイスラエルがエジ

プトでの古いパン種を持っていることは矛盾です。それはすでに捨ててきたはずで、それとは縁を切ったはずで、ですからかつての生活に逆戻りしないこと、信仰を持つ以前の古い生活と関係を持たないということです。ですからコリント教会の中にあつた近親相姦の罪をそのまま許容してはならないのです。それは古いパン種であつて除き去らなければなりません。さらにパウロは古いパン種を言い換えて、「悪意と邪悪のパン種」とも言います。こうして父の妻を妻にしているという罪だけでなく、あらゆる悪の生活のことをパウロはここに含めています。神を信じる以前に持っていたあらゆる悪のパン種は後ろに捨てて来たのだから、それを再び用いるようなことをしてはならないと。

そしてより積極的に「誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか」と言います。「誠実」とは神の前に後ろめたさがないこと、裏表がないこと、その動機において神の前に偽りがなく、最後のさばきの日が来ても慌てることのない、神への清い良心と喜びを持って歩むことでしょう。一方の「真実」は、同じような意味と考へても良いと思いますが、ギリシャ語では通常「真理」と訳されるアレーセアという言葉がここで使われています。ですから真理に沿つてというニュアンスが含まれていると見るのが良いかと思ひます。自分がどのような救いの中に入れられたのか、福音の真理を受け止めて、その真理に立ち、その真理に忠実に、真実な歩みをするということです。

今日の箇所から教えられることは私たちが過越の子羊が屠られて出エジプトを果たし、神の民として新しい救いの状態へ導かれたあのイスラエルの状態にある者たちであるということです。いやあの出来事が指し示す真の意味の救いにあずかっている者たちであるということです。その私たちに必要なのは古いパン種を用いない生活をするということです。教会の中に古いパン種を残したままにしてはなりませんし、またもし自らの生活の内にそれがいくらかでもあるなら、急いで悔い改めて、それを後ろへ捨てなければなりません。古いパン種を手元に保ちつつ過越の祭りを祝うというのは矛盾です。むしろ私たちが向かうべきは、古いパン種を後ろに捨てて、誠実と真実の種なしパンで祭りの生活をするということです。キリストの十字架による救いを心から感謝し、誠実と真実をささげる歩みをするということです。そうして毎日がキリストの救いを祝い、喜び、賛美する祭りの生活へと導かれたいと思ひます。またその歩みを通して、私たちに救いを与えてくださった神に全ての栄光を帰す神の民の歩みへ導

かれて行きたいと思います。